

若手教員の授業力向上を目的とした教師の連携・相互理解のあり方について

— 中学校における学年内連携を通して —

所属校：八王子市立第一中学校

氏名：上野 和広

派遣先：東京学芸大学教職大学院

キーワード：相互理解・同僚性・若手教員・授業力向上

I 研究の目的

中学校現場では、これから数年の間に、教員の大量退職時代を迎え、新規採用の教員を含む若手教員の急速な増加により、若手教員の計画的な育成、授業力の向上が早急かつ重要な課題となっている。

中学校において若手教員を育成していく上で大きな壁になっているのが教科担任制である。教科担任制では自身の専門外の教科について指導・助言、授業見学をするという傾向がほとんどなく、これまでは教科内での育成に限られてきた。

若手教員が授業を行ってうまくいかない場合でも、同じクラスの生徒を指導力のある同学年の教員が授業を行うと全く異なる素晴らしい授業になることも多々あり、そのような場合、教科に関わらず他の教員の授業を見学することで自分の不足しているところを発見できるだろう。しかし、実際には他教科との連携は円滑に行われず、学年全体での若手教員の授業力向上を目指した育成を行うことが大きな課題である。

そこで、本研究では中学校における若手教員育成のための方策として、学年内の教師間連携・相互理解のあり方を示し、それを推進していくためのプログラムの開発と、効果的な活用法を提案することを目的とした。

II 研究の方法

基礎研究	<ul style="list-style-type: none"> 若手教員の育成を行う際の問題点、課題について文献、先行研究を通して把握する。 教師間の連携・相互理解を行う際の問題点、課題について文献、先行研究を通して把握する。 人材育成に関する文献、先行研究の調査、分析を行う。
調査研究	<ul style="list-style-type: none"> 授業力向上のための研究を推進している学校への訪問調査。 若手教員の授業評価を所属校生徒対象に実施する。 八王子市内若手教員対象の質問紙調査を実施する。 中堅教員・ベテラン教員対象の質問紙調査、インタビュー調査を実施する。
実践研究	<ul style="list-style-type: none"> 授業相互観察シートの開発 若手教員の授業を同学年に所属している教員に授業観察をしてもらう。 書き込み回覧形式の協議会の実施

III 研究の結果

1 授業相互観察と協議会のシステム開発

(1) 授業相互観察シートの開発

これまでの質問紙調査およびインタビュー調査をもとに、授業規律、生徒との関わりに関する授業観察項目を11項目設定し、図1の「授業相互観察シート」を作成した。

・ 9月～11月毎月1週間程度の授業相互観察期間を設定し、同学年教員に若手教員の授業観察を実施してもらった。

・ 限られた空き時間を有効活用し、多くの授業を観察してもらうため、観察時間を1時間単位とせず、流動的なものとした。

・ 1～11の観察項目は流動的な授業観察に特化した質問に設定しており、どのタイミングで授業観察に参加しても、その場面ごとに適したチェックができるようにした。

・ どの時点で授業観察をしたのかを明確にするために参観時間を記入できるようにした。

・ 授業案によらず、どの教科の授業においても共通して使用できるフォーマットとした。

・ 授業の中で良かったこと、気になったこと、質問・アドバイス等を自由記述欄に記入してもらった。

(2) 協議会への書き込み回覧方式の導入

(表1) 授業相互観察後の協議会の流れ

1	授業者と観察者が円(右図)のようにテーブルを囲み、各自が記入した「授業相互観察シート」を回覧する。
2	他の観察者の「授業相互観察シート」が手元にきたら自由記述欄を確認し、自分が自身が書き漏らしたことが記入されていたり、思いよくなる考えのことが記入されていたら『me too』と赤ペンで記入してください。
3	授業者のところに「授業相互観察シート」がきたら、自由記述欄に記入されていることに対して質問があれば赤ペンで記入する。(質問欄に質問が記入されている場合は、返事を記入する。)
4	「授業相互観察シート」が自分の手元に戻ったら、観察者は質問への返事を書いて授業者へ返す。
5	協議会を通して、授業者が学んだこと、気づいたこと、今後の課題等について意見をまとめる。

3回実施した授業相互観察期間の最終日に書き込み回覧方式の協議会を導入し、表1の手順で行った。こ

(図1) 授業相互観察シート

これまで授業観察後行われる協議会では、多くの時間を確保する必要があり、1人の若手教員に対して複数の中堅教員、ベテラン教員がそれぞれの視点から指導・助言をしていくことが多かったのだが、今回の導入した書き込み回覧方式の協議会では、短時間で密度の濃いものとするために、各自の発言を省略化し、また、互いの考えていることを理解できるような工夫をした。

2 システムの効果測定

(1) 若手教員の授業力向上

① 生徒による授業アンケートより

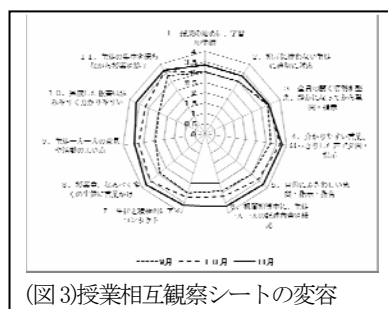
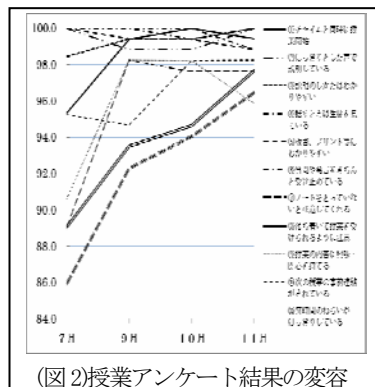
9月から11月の計3回行われた若手教員の授業相互観察および協議会終了後に授業に関する11項目のアンケートを生徒対象に実施し、7月時点での若手教員の授業における課題がどのように変容し、改善されていったのかを明らかにした。(図2)

・ 授業アンケートより、7月の時点であげられていた若手教員の課題は3回の授業相互観察を通して大きな変容が見られ、授業の内容に興味・関心をもたせる教科の専門性、ノート記述の有無や私語の注意等授業規律に関して大幅な改善を確認することができた。

② 授業相互観察シートより

計3回の授業相互観察時に図1の授業相互観察シートを活用し、授業規律、生徒との関わりに関する11項目をチェックし、若手教員の変容を明らかにした。(図3)

・ 同じ生徒を指導する学年教員が授業相互観察をしたことにより、教科の専門的な内容ではなく、どの教科における指導でも共通する、授業規律や生徒との関わり方の視点から若手教員の授業を確認することができた。特に、生徒の意見や活動の取り上げ方、褒め方、板書の読みやすさなどについては具体的に指摘してもらうことで大幅な改善につなげることができた。



3 学年の同僚性の構築

(1) 授業相互観察・協議会参加者の変容

3回の授業相互観察を通して、回を追うごとに授業観察者が増えていった。それに対応するように一人あたりの授業観察時間も次第に長くなっていき、1回目の平均観察時間は16.25分であったのが、2回目には17.5分、最後の3回目には27.9分となり大幅に増えていった。特に3回目は進路指導の時期と重なり、時間を確保することが難しい状況であったのだが、多くの教員に長時間観察してもらうことができた。協議会に関しては、当初は、協議会として時間を設定し、表1の方法で手順通り実施するだけだったのだが、短時間で計画通り進むことが明確になったこともあり、2回目、3回目では学年会の一部として位置づけてもらうことができた。また、協議会終了後には若手教員を含む学年教員全員の間で自然と会話が広がり、若手教員からは自身の授業のアドバイスを求め、他の教科の教員の授業運営に関して質問をする様子を見ることができた。一方学年の中堅教員、ベテラン教員からは、若手教員の授業についてのアドバイスやいいところを褒めている場面、自分自身の授業で気をつけていることなど、これまでの教師経験に基づいた声かけをしていた。

IV 考察

教科担任制を導入している中学校において、さまざまな教科を担当する教員が集まる一つの学年内で若手教員の授業力向上を目指した授業研究、教科の壁を越えてそれぞれの指導方針を理解し合う相互理解はほとんど行われておらず、実施には困難を極めた。また、授業観察や協議会を行おうという意欲はあっても時間が確保できず、実施に踏み切れないことも多かったように感じる。今回、若手教員の授業力向上という一つの目標のもとに、授業相互観察および協議会というシステムを導入することにより、この若手教員の授業力向上、教師の連携・相互理解、時間の確保の三つの課題を一気にクリアすることができ、一つの学年内の同僚性を高めることに成功した。若手教員が増加している今、課題ばかりが叫ばれているが、このシステムによって若手教員がいることのメリットも表すことができたのではないだろうか。

今後多くの学校において、今回開発した授業相互観察および協議会システムを導入することにより、若手教員の授業力を効率的に育成し、かつ学年内の連携・相互理解を深め、その成果を多くの児童・生徒に還元することができればと思う。